

感覚が広げる歴史の世界

濱田 麻矢

文学研究と歴史研究とは、本当に「違うもの」なのだ、と思うことがある。

例えば、ある小説の背景を知ろうと当時の社会史を扱った論文に取り組んだとする。小説世界に近づくために読んでいるはずなのに、あれよあれよといううちに政治思想史の世界へ迷い込み、かえって小説中の小人物たちを見失ってしまうことがあるのだ。あるいは、ヒロインをよりよく知ろうとして女性解放史を参照してみた時。ヒロインに備わっていた特徴（生い立ち、服装、教養など）を手がかりに、どんな個性をもった女性だったかを考えようとしているのに、いつのまにか個性など消え失せ、彼女は「進歩」または「墮落」という二者択一の岐路に立たされてしまっているのである。

自分が読んでいる小説の世界と、同じ国・同じ時代を取り上げた歴史学の成果が重ならないのは歯がゆいものだ。その歯がゆさに対して、今までは歴史研究とは事実を対象として考証を重ねるものなのだから、フィクションの「面白さ」を考える文学研究とは質がことなっており、然るべきであって、しかたないものなのだろうと漠然と考えてきた。

ところが、本書『新史学』が冒頭に掲げる主編楊念群氏の「中国史学需要一種『感覚主義』」は、歴史学にこそ現在「感覚」が必要とされている、と説く。「わたしたちは、いかにいわゆる『問題意識』を築くかということばかりに気をとられていて、史料を解読しながら『感覚意識』を育てるという努力を怠ってきた

楊念群主編

新史学

第一巻 感覚・図像・叙事



中華書局
2007年 [2793円]

た」(四ページ)。つまり、史料を読解する力と、史料の裏に潜む感覚を探り当てる能力はまったく違うレベルに位置するといえるのである。楊氏は主人が客に発する「ごはんを食べていきますか? (留守吃飯吧?)」という何気ない一言を例に挙げてその「感覚」を説明しているが、これはまさに京都の「ぶぶ漬け」と同じで、言葉の表面からは主人の考えは解し難い。婉曲に辞去するよう促しているのか、心からもてなしたいと思っているのかは、主客の関係その他の状況から読み解かなければならない、というわけである。こうして楊氏は以前の『問題意識』主導型の歴史学が分析の対象としてきた

中国研究所 会員制度のご案内

当研究所は、中国およびアジア諸国との友好を願う立場から、現代中国の政治、経済、社会、文化、歴史を科学的に研究する民間研究機関として、1946年1月に創設されました。以来今日にいたるまで、出版物の編集発行、専門図書館の運営を活動の柱とし、日本における中国の調査・研究の拠点として歴史を重ねてきました。

中国研究者および広く中国に関心のある方々の参加と交流を目的とした個人向けの研究会員制度を設けております。当研究所の趣旨をご理解の上、入会をご検討いただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

本年度より、学生・院生を対象に、研究会員費の割引制度を始めました。詳細は事務局までお問合せください。

【研究会員】

会費(1年間) : 9,600円

学生割引価格 : 5,000円

【会員特典】

- ・当研究所発行の学術月刊誌『中国研究月報』の無料配布
- ・当研究所主催の公開講座等の参加料割引
- ・附属図書館の閲覧料無料 等

(社)中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: cchuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/ica/>

「思想世界」「社会世界」とは異なる「感覚世界」を想定し、公開された思想表現(「ぶぶ漬け」と、表現主体の本音(早く帰ってほしい/心からめてなしたい)とのずれを跡づけてゆく作業が必須であるという。

さて、主編のこうした知見のもとに集められた論文について、まず章立てと目次を掲げて、内容をごく簡単にまとめておく。

感覚・叙事・想像
文字何以成獄?——清初士人逃隱風格
与「江南」話題(楊念群)
傷逝…対民国初年新女性形象の一種解説(海青)

語言・事件・表述

「她」字的故事…女性新代詞符号的発明、論争与早期流播(黄興濤)

没有暴動的事件——關於抗日戰爭時期先天道事件的表述問題(孫江)

図像・史観

病態的身体——林華の医学絵画(韓依薇 (Yarissa Heinrich))

図像歴史…以《晋察冀画報》为中心的視覚解説(行龍)

城市・故事

繁華作為歷史…狂飲与急進的上海(一八三〇—一九一〇)(孟悦)

誘拐の命運…二〇世紀四〇年代北京の男女交際、伝統礼教和法律原則(馬

鈞)

楊念群論文は、清初の「文字獄」の経過を、事件の連鎖という現象面からではなく、北京在住の皇帝における江南イメージの変容と、明代遺民による「気節」理解の変質から跡づけてゆこうとする。海青論文は、民国初期の女性の様々な死(特に自殺)とその語られ方を掘り下げてゆくことによって、従来の女性史による新旧の枠組みを相対化している。

黄興濤論文は、「她」が女性を表す代名詞として勝利し、定着するまでを資料を博搜して緻密に検証したものである。孫江論文は日中戦争期の秘密結社による「暴動」事件が、日本政府、国民党政府、

共産党政権それぞれの政治的立場によってその性格を「藪の中」のように変えるさまをあぶり出してゆく。

Heinrich 論文は、十九世紀中頃に広州で医療活動を行った米国人医師、ピーター・パーカーが中国人画家林華に描かせた病人の肖像をさまざまな角度から分析し、図像が中国の「病理」イメージの形成に果たした役割をさぐる。行龍論文は、抗日戦争期の根拠地につくられていた『晋察冀画報』を対象にして、戦時におけるイデオロギー形成と図像との関わりについて述べる。

孟悦論文は、資本主義体制の「都会」とは異なるメカニズムの「繁華街」として十八世紀の蘇州、揚州、そして十九世紀の上海を捉え、特に上海における戯曲文化の隆盛に、従来言われてきた「西洋近代の移植」とは性格を異にする中国都市文化の連続性・内在性を見いだす。馬剣論文は、ある「誘拐」事件にまつわる裁判文書を軸にして、一九四〇年代北京という都市空間における男女交際のあり

ようと、彼らを取り巻く家族（特に父母）が何をもって「道徳的／非道徳的」と考え、証言台に立ったのかを再現する。

以上八編、時代はほぼ清初から解放前夜までの近代中国ということになるのだが、テーマの選定も謎解きをしてゆく「感覚」も、さまざまなバラエティーに富んでいてどれも読み応えがある。中でも評者は民国期の小説、特に女性にまつわる叙事に関心をもち、海青論文にひきつけられたので、以下にやや詳しく紹介してみたい。

まずは胡適の書いた伝によって死後世に知られることになった李超を皮切りにして、鬱屈のために病んで死んだもの、意に染まぬ結婚を拒んで死んだもの、よくわからない理由で集団自殺したもの……、生前無名だったにもかかわらず、その特異な死によつて名を残すことになった女性たちが何人も紹介される。その死が残された者にどのように語られ、推測され、物語として再生産され、そして消費されたのが丁寧を追われてゆく

さまは圧巻である。また、そうした「物語」が事件という「事実」と小説という「虚構」を結ぶ重要な紐帯となつてゆくことも筆者は見落とさない。たとえば恋人に貞操を疑われて身投げした馬振華の物語は『馬振華哀史』として映画化された。海青の分析は、その映画を見て自分の運命を馬振華に重ね、絶望のあまり自殺する女性をヒロインにした小説が茅盾によつて書かれるところにまで及ぶ。つまり事件（事実）としての自殺が、映画（半虚構）として消費され、さらに小説（純虚構）の題材として利用されてゆくのである。小説化に際して、茅盾は「革命」

を従来の「愛」や「性」にとつてかわる装置として持ち込んだ。「矛盾小説における」革命は一切の道徳の汚点を洗い流し、女性に決して打ち破ることの出来ない永続する『貞操』を賦与し、女性を失節の恐怖から完全にすくい上げる作用を持つ（九四ページ）。つまり矛盾にとつて、革命への意識が低く、自分から時代に関わり合おうとしない女性が愛の

幻滅に際して死を選んだのだということになる。このような指摘はもはや文学研究の範疇に属する見解だが、それは矛盾のテキストのみから導き出されたのではなく、馬振華を初めとする当時の自殺事件をめぐる緻密な考証の蓄積からでた結論であり、故に大きな説得力を持つことは言うまでもない。

本論文に登場する文学者は茅盾だけではない。自分の死をはっきりとイメージして記していた石評梅や、その石評梅の死に立ち会った黄廬隱、『自殺日記』や『莎菲女士的日記』を書いた丁玲などの女性作家までが論じられ、個別の自殺事件やそれにまつわる記述によって、「死をテーマとする清談と瞑想が都市の知識女性たちの特徴となつて」いたのだという見解が示される。評者は、二〇年代の彼女たちの作品に死が頻出するのは、口語小説というジャンルがまだ熟していなかったからだと思っていたが、海青氏によれば、当時の社会において、死というものが、若い女性たちの傍によりそう

日常的なものとして感じられていたのだということになる。これは大変興味深い指摘だが、二〇年代の社会事件と文学との関わりについてはなお新しい議論を俟ちたい。

この論文は『傷逝』というタイトルを冠しながらも、魯迅の同名の小説については一言も触れてはいない。しかし二〇年代の中国において、子君のような女子学生の死がどのように意味づけられ、語られてきたのかについて語る本論は、そのまま『傷逝』への立体的な注として読まれるであろう。

他の論文からもいろいろ学んだことがあるのだが、もう紙幅が尽きてしまった。編者のもくろみ通りに私が「感覚主義」を受け止めることが出来たかどうかは心許ない。また、「感覚主義」を掲げる歴史研究に対する違和感をもつ読者もいるであろう。たとえば『中華読書報』二〇〇七年五月一六日第一版は楊氏の「感覚主義」宣言を中心にした特集を組んでいるが、「感覚主義」は歴史の現場から

研究者を遠ざけるものに他ならないという苦言も見られる（夏明方へ「感覚主義」的「盲人摸象」）。URLは http://www.gmw.cn/01ds/2007-05/16/content_608181.htm）。しかし、評者のように歴史に苦手意識を持つ者が没頭して読むことができたのは、随所にあふれる「感覚」のおかげであったことは確かである。この『新史学』主編は輪番制をとることとなつて、第二巻にはまた違った切り口を期待したい。梁啓超の『新史学』から百年余、歴史学への追求は、なお日々「新しい」ものであり続けるようである。

*『新史学』を読むよう薦めてくださったのは、大阪市立大の松浦恆雄さんと大阪大学の今泉秀人さんである。読まず嫌が多い評者にいつも面白い本を紹介してくださるお二人に感謝したい。

（神戸大学）

